

完了報告書（平成 22 年度）

提出者 山本 理子

提出年月日 2011 年 3 月 31 日

【プロジェクト名】

和文 フィリピン駐在日本人主婦のメイド雇用がもたらす母親業の再構築

英文 Restructured Mothering of Japanese Expatriate Housewives Who Hire Maids in the Philippines

【メンバー構成】

研究代表者 山本 理子

幹事

メンバー 山本 理子

【ねらいと目的】（600 字程度）

本研究は、2008年度に筆者が実施したGCOEの次世代ユニット研究の継続調査の実施を意図するものである。2008年度の調査ではフィリピン・マカティ市およびその近郊に在住する日本人主婦へのインタビューをとおしてメイド雇用の実態を考察した。本年度の調査でも、2008年度に引き続き、同地にて日本人主婦のメイド雇用の実態と家事全般のメイドへの委託についてより多くのデータを収集する予定である。

本研究の目的は、2008年度に引き続き、家事労働者（メイド）を雇用することにより、どのように家族という親密圏が変容していくのか、を議論することである。とくに近代家族の成立以降に付与されてきた家族および家事労働の意味づけの変容に焦点をあてる。雇用主にとって私的な場である家庭は、メイドにとって労働の場であり、まさに親密圏と公共圏の交錯といえる。本研究は、雇用主側の親密圏の変容にとくに注目するものであるが、本プログラムの趣旨に沿うと思われる。

本年度の調査では、母親による乳幼児の世話を重要視とする『三歳児神話』がまだまだ根強い日本で、乳幼児をかかえた主婦がメイド雇用によってその母親業をいかに再構築するのかという点から、メイド雇用と日本人主婦の育児実践の変容との関連について考察を深めたい。ただし、乳幼児をもつ主婦だけではなく、可能であれば子育て期を終えた中高年層の主婦や子どものいない主婦、さらに、メイドを雇用できる環境にありながら、メイドを雇用しないという選択をする主婦も補足的にサンプリングすることで、日本人主婦とメイド雇用とともなる親密圏の変容を、とくに本年度は育児との関連で、より深く理解できるのではないかと考えている。

【活動の記録】

調査者：山本理子

調査期間：2010年6月8日～2010年12月2日

調査地：フィリピン国マカティ市サルセド・レガスピ・ロックウェル地区およびタギッグ市グローバルシティ地区

調査対象・人数：上記地区在住の駐在日本人 28 人

調査目的：日本人主婦の主婦役割および母親役割とメイド雇用の関連について検討するため

インフォーマント収集方法：スノーボール・サンプリング

インタビュー方法：半構造化されたインタビュー

【成果の概要】（800字程度）

本年度の研究では、2010年度と同様の調査方法（スノーボール・サンプリング、半構造化されたインタビュー）に基づくインタビュー調査によって得られた事例から、フィリピン首都圏在住の日本人駐在主婦のメイド雇用経験のなかでも、子どもの有無によってメイド雇用と自身の家事への意味づけの差を考察した上で、就学前の子どもがいる母親における母親業のあり方に、メイド雇用がどのように関連しているのかを検討した。

子どものいない主婦では、メイドへの家事の委託はあくまでも、自分よりも上手なプロによる家事サービスの購入という認識に基づいており、メイドに委託する家事を選別し、こだわりのある家事を自ら行うことで、自身の「主婦アイデンティティ」を維持する。事情によって住み込みのメイドを雇うなど、メイドがほとんどの家事を行うような状況になると、主婦アイデンティティにゆらぎが生じるものの、家事をしない代わりに趣味等を充実させることで自身の精神的安定、感情マネージが家族（夫）にとってプラスであるという解釈がなされる。

一方、就学前の子どもがいる場合には、メイドへの家事委託は、母親がより子どもに配慮した母親業、家族における「子ども中心主義」を促進させるためのものであり、家事の仕上がり以上に、母親による母親業をサポートするという点がメイドに期待される。子どものいる主婦はメイドの存在によって自身の「母親アイデンティティ」を強化し、子どものいない主婦に比べると、自身が母親業に集中するためにメイドに家事を委託することを強く肯定する。

子どものいない主婦の「主婦アイデンティティ」の維持による委託する家事の選別や、子どものいる主婦の「母親アイデンティティ」の強化による自身の母親業への集中の背景には、駐在主婦をとりまく社会的制約（就労の難しさ等、生活における行動の制限）が関連していると考えられる。

【通信欄】

次世代ユニット採用後に妊娠が判明し、研究成果報告会では出産間近ということで研究報告について代読者をたてる形で許可していただき、本当にありがとうございました。

（研究代表者記入）

プロジェクト	<input type="checkbox"/> 次世代	<input checked="" type="checkbox"/> 次世代ユニット	<input type="checkbox"/> 男女共同参画に資する調査研究
経費	予算額	250 (千円)	実績額 214,723 円

調査地域の写真



写真1 ある午前中の S 地区の公園

左手前、制服を着た二人のヤヤ（ベビーシッター）がフィリピン人の子ども二人を連れて歩いている。左奥で、日本人の母親たちが自ら自分の子どもたちを遊ばせている。このように公園で遊ばせるときもメイド・ヤヤに任せず自ら公園に出向いて子どもの面倒を見る日本人の母親たちの姿はよく見られる。



写真2 ある夕方の G 地区の公園

左手前には自ら自分の子どもを見る日本人の母親数名。それ以外はほとんど制服を着たヤヤ（ベビーシッター）である。非日本人の家庭で働くフィリピン人のヤヤは制服を着ていることが多いので、連れてくる子どもの母親でないことは一目でわかる。



写真3

あるスーパーマーケットで売られていたメイド用の制服。調査者が知る限り、メイド・ヤヤに制服を積極的に着せている日本人雇用主は少ないようである（ただし、メイド本人が望んで作業着として制服を欲しがることもあるらしい）。